

序

奈良国立文化財研究所では現在その仕事の重点を諸々の文化財の基礎調査と総合研究とに置いている。ここに基礎調査というのは、例えばどこかの寺院にある建築とか彫刻とか絵画とか工芸とかを、それぞれ一つ残さず小さな断片までも精密に調べあげて、それ等にほぼどんなものがあるかということをはっきりと明らかにするもので、これまでにこの研究所で実施した基礎調査の主なるものに、唐招提寺における建築、彫刻、絵画、工芸、古文書等の調査や、西大寺の絵画、古文書類の調査などがある。また総合研究とは、一つの研究題目に建造物や美術工芸や歴史等の各部門のもの達が寄り集つて、これを各方面から考究するもので、これまでの総合研究には、東大寺大和尚南無阿弥陀仏重源に関する研究や、西大寺興正菩薩叡尊の研究などがある。そしてこれ等の基礎調査と総合研究とを兼ね合わせたものに、飛鳥寺、川原寺の調査研究や、平城宮跡の発掘調査などがある。これ等の調査なり研究なりは、奈良という文化財の宝庫のまん中にある研究にしてはじめてなし得られるものであるから、こんなやり方は今後ともずっと続けてゆきたいものと念願している。

ただこうした研究の成果を世に問うための学報なり史料集なりの出版については、これ等があまりに地味なものだけに、なかなか思うようにいつていながつたといつてよい。ところがこの五月十二日

における研究所の十周年記念式典に際して会長中山正善氏，副会長赤坂頼磨氏，同越智岩太郎氏，同橋本凝胤師，幹事長和田軍一氏等による奈良国立文化財研究所十周年記念事業後援会の絶大な援助によつて，たまたま研究の各研究室ですでにでき上つていた四篇の研究を一度に出版することができたのは，まことに喜ばしい限りといわなければならない。たしかにこれ等の研究は，それぞれの専門分野において必ずやその並々ならぬ努力のほどが認められるものと信じて疑わないし，またそれは後援会を通じてこの記念事業に協賛された方々の要望にも応えることができるものと自負している次第である。

因みにこれ等の学報がこうして出版されたについては，そこに天理の養徳社のまつたく厚意そのもののような献身的な努力があつたことを，とくに申し添えて置きたいと思う。そしてこれ等の学報の内容なり出版なりについて何かと御心添を賜つた方々に心から御礼を申し述べる。

昭和37年4月10日

奈良国立文化財研究所長

小 林 剛